

令和4年度石川県こころの健康センター調査研究

調査研究テーマ

「DV男性加害者の意識に関する調査」

報告書

令和4年10月

石川県こころの健康センター

DV男性加害者の意識に関する 調査研究報告書

研究責任者

石川県こころの健康センター
福祉専門員

深谷 敏

研究協力者

石川県こころの健康センター

所 長
次長兼相談課長
健康推進専門員
非常勤職員
(元次長兼相談課長)

角田 雅彦
竹本 玲湖
濱松 湊子
飯田 芳枝

1. 調査研究の目的及び意義

2001年(平成13年10月)に「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」(DV防止法)が施行されたが、石川県ではそれに先立ち平成13年4月よりDV男性加害者の暴力抑止に関する相談窓口をこころの健康センターで開設した。(国内初のDV男性加害者に対する公的相談窓口。)

DV男性加害者がDV脱却に向かう過程で、どのようにDVの問題を意識し、向き合い、受け入れていくかを明らかにすることを目的とする。

DVの問題に取り組もうとする男性は、現在でも非常に少ないと考えられる。本気で暴力を何とかしようと思うことにはとても勇気がいるため、その過程を明らかにすることはDV男性加害者への暴力抑止支援に非常に有益であり、DV被害者を減らすことが期待される。

2. 研究の方法及び期間

アンケート調査用紙を調査対象者に郵送し、無記名、自記式で、解答してもらった。アンケート調査期間は令和4年4月1日から令和4年5月15日とし、令和4年5月22日までに返信用封筒で回収を試みたがコロナ禍で返信投函するのを躊躇するケースもあることが予想されることから、その回収期間を令和4年6月7日まで延長して対応した。

この研究の期間は令和4年4月1日から令和4年9月30日とする。

3. 研究対象者の選定方針

平成25年度以降、現在までに研究責任者が個別面接をしたDV男性加害者46名を調査対象者として選定した。

4. 調査解析

回収したアンケート調査票の各設問を単純集計した。さらに集計結果にあたって設定した調査の目的に沿った考察を加えた。

なお、自由記述回答については、当事者の声をそのまま伝えていくことが重要であると考え、質的分析を行わず掲載した。

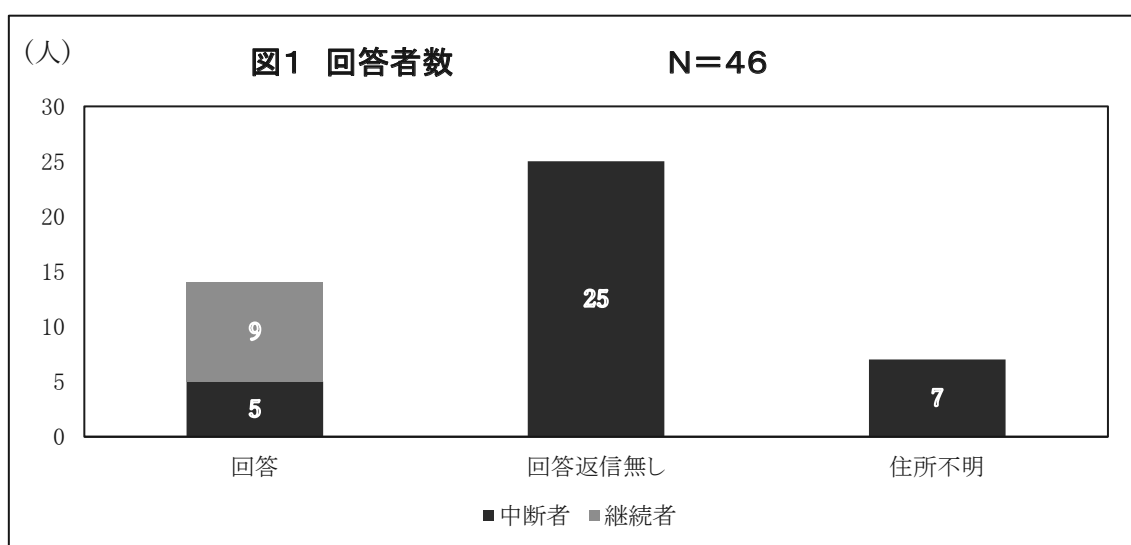
5. 倫理的配慮

調査研究の実施にあたっては、「石川県保健環境センター倫理審査委員会設置及び運営要綱」に従い、アンケート調査を依頼する時に、本調査研究目的以外の使用はしないことなどを記した、説明文書を同封した。特にプライバシーポリシーには細心の注意を払い、回答者の住居地域など個人情報が特定されないよう十分配慮しながら実施した。

6. アンケート調査の結果

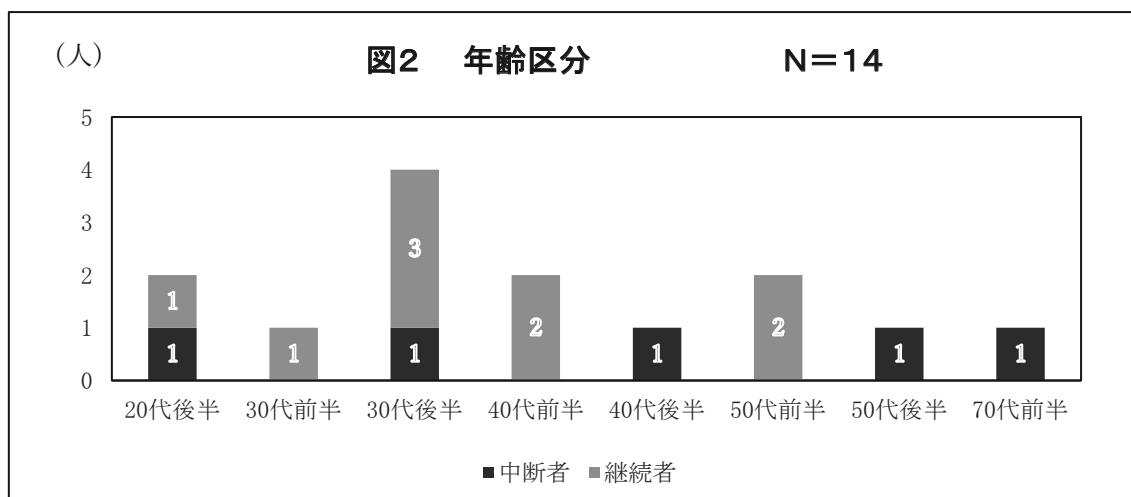
1) 図1 回答者数

アンケート調査は46名に郵送で依頼した。回答者の内訳は個別面接の継続者9名と中断者5名の合計14名、回答なしが25名。住所不明で戻ってきた人が7名であった。

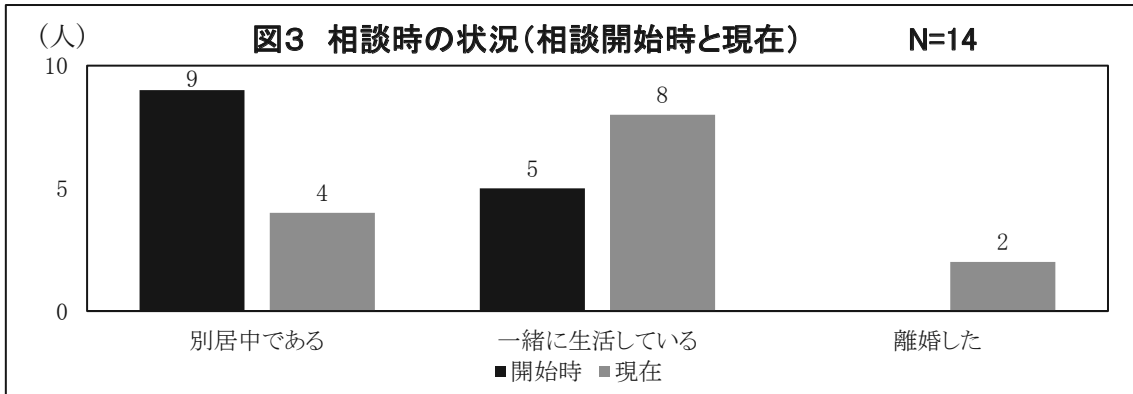


2) 図2 回答者の年齢区分

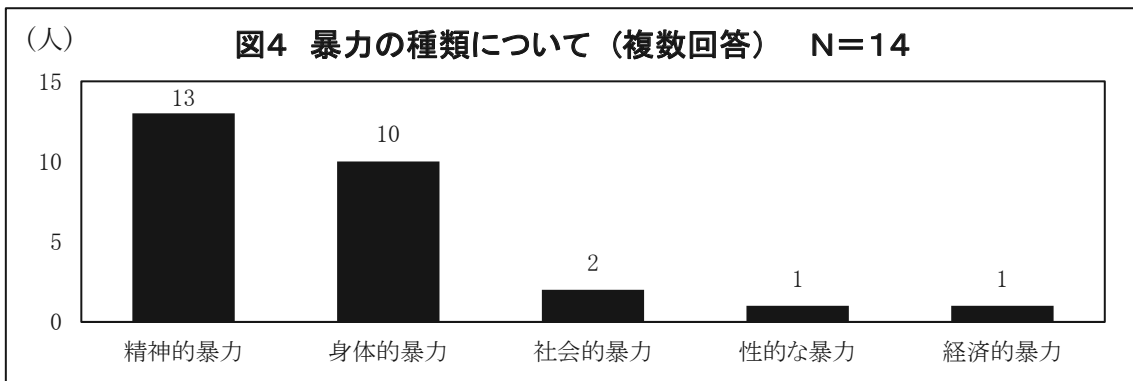
図2はアンケート回答者の相談開始時の年代別で、20代後半2名(中断者1名、継続者1名)、30代前半1名(継続者1名)、30代後半4名(中断者1名、継続者3名)、40代前半2名(継続者2名)、40代後半1名(中断者1名)、50代前半2名(継続者2名)、50代後半1名(中断者1名)、70代前半が1名(中断者1名)の回答があった。



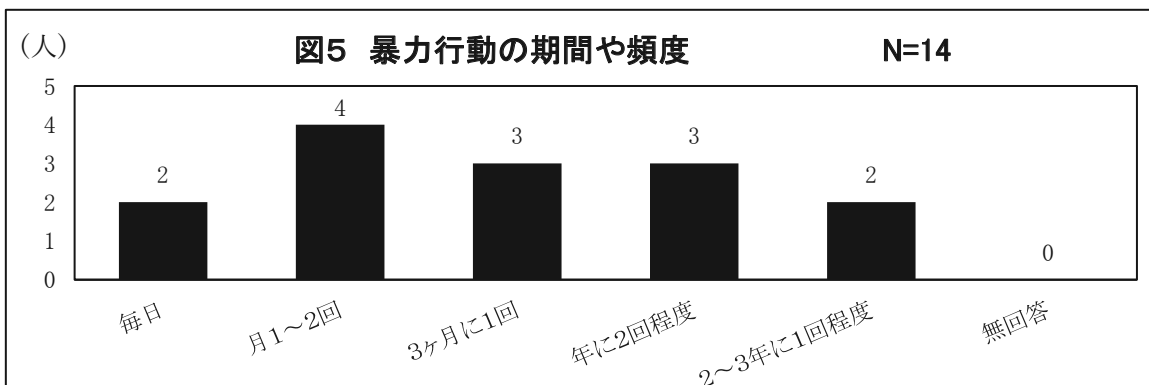
- 3) 図3 相談開始時と現在のパートナーとの生活状況
 相談開始時に別居中が9名、一緒に生活している人が5名であったが、現在は別居中が4名に減り、一緒に生活しているが8名と増えて、離婚した人は2名いた。



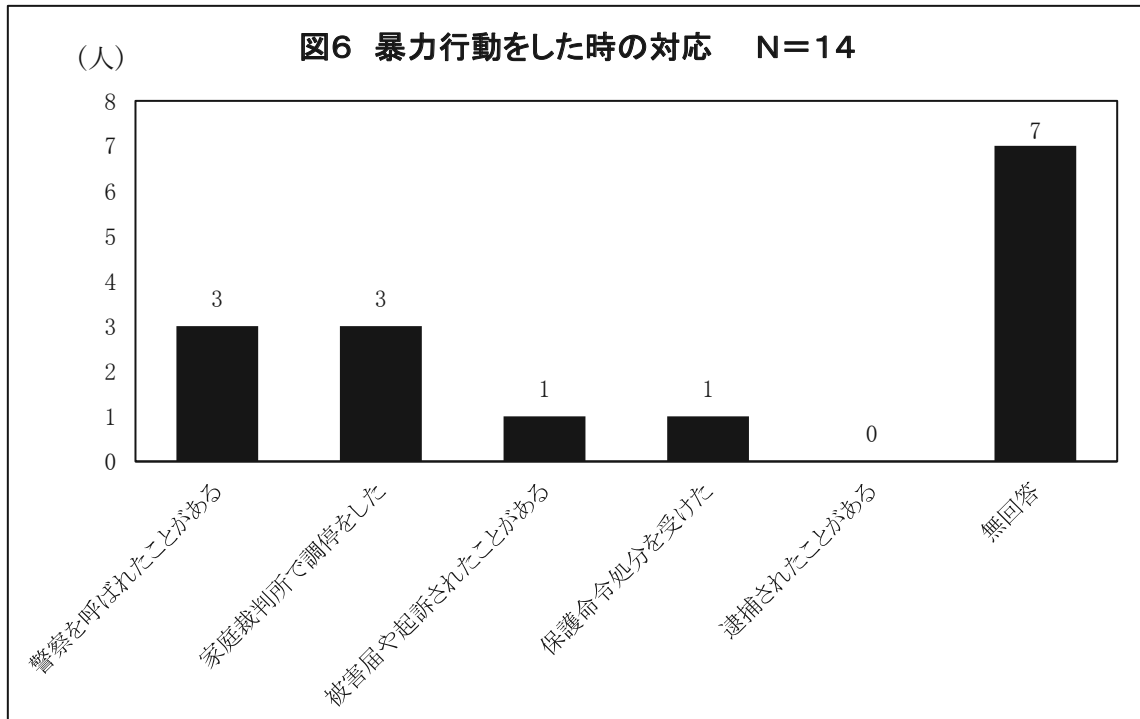
- 4) 図4 相談開始前の暴力行動について(種類) (複数回答)
 暴力の種類については精神的暴力が14名中13名と最も多く、次いで身体的暴力が10名、社会的暴力が2名、性的な暴力、経済的暴力がそれぞれ1名いた。



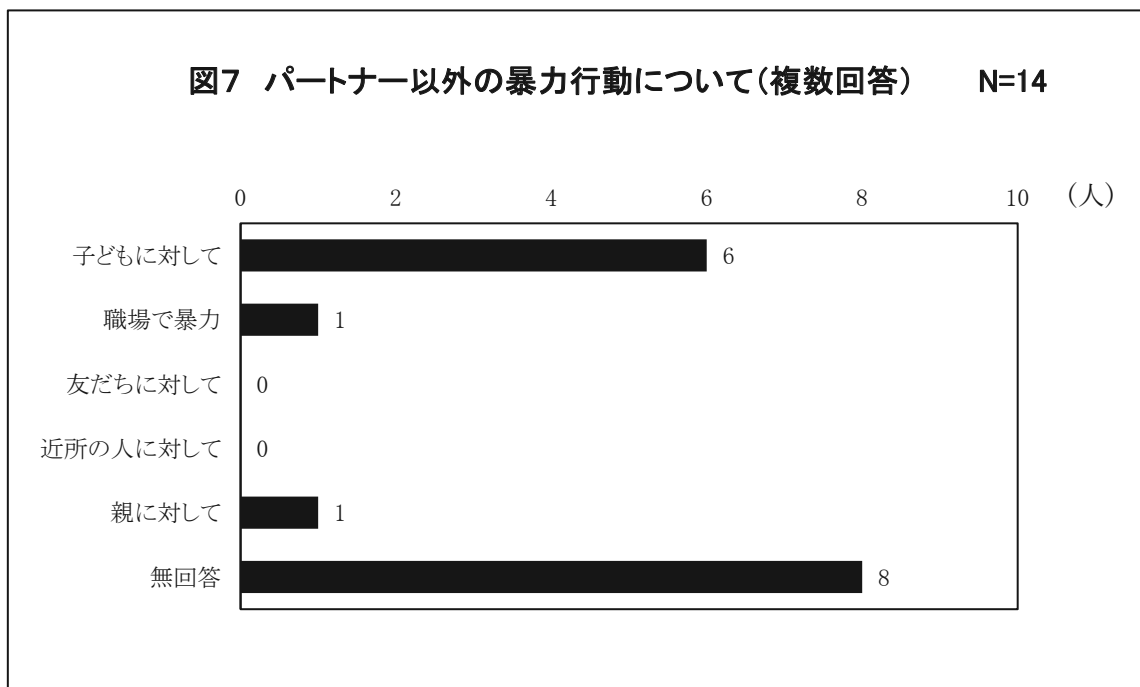
- 5) 図5 相談開始時の暴力行動について(期間や頻度)
 暴力の頻度については毎日暴力をふるった人が2名いた。月に1~2回の人4名、3ヶ月に1回が3名、年に2回程度の人3名、2~3年に1回程度の人2名いた。



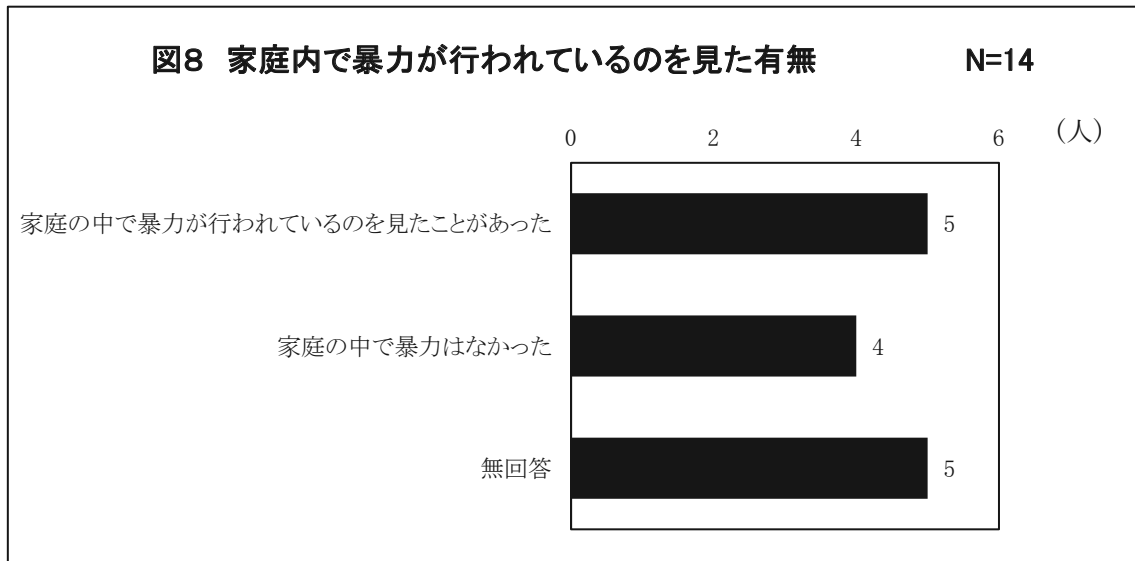
- 6) 図6 相談開始前、暴力行動をした時どのように対応されたか（複数回答）
 暴力行動をした時に警察を呼ばれた人、家庭裁判所で調停をした人がそれぞれ3名おり、被害届や起訴された人が1名、保護命令処分を受けた人が1名、逮捕されたことがある人はいなかった。



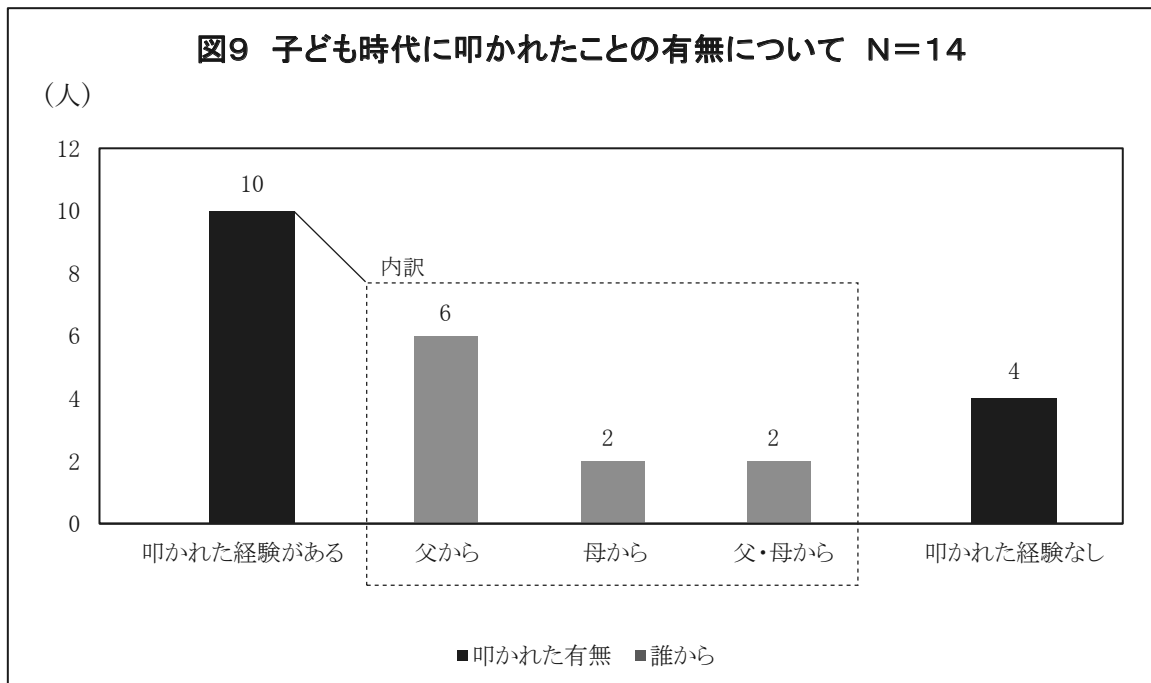
- 7) 図7 相談開始時にパートナー以外への暴力行動をしたか(複数回答)
 パートナー以外では子どもに対して暴力行動をした人が6名と多く、職場で暴力、親に対して暴力行動をした人がそれぞれ1名いた。



8) 図8 回答者が子ども時代に家庭内で暴力が行われているのを見たことがあった人が5名、家庭の中で暴力はなかった人が4名、無回答が5名であった。

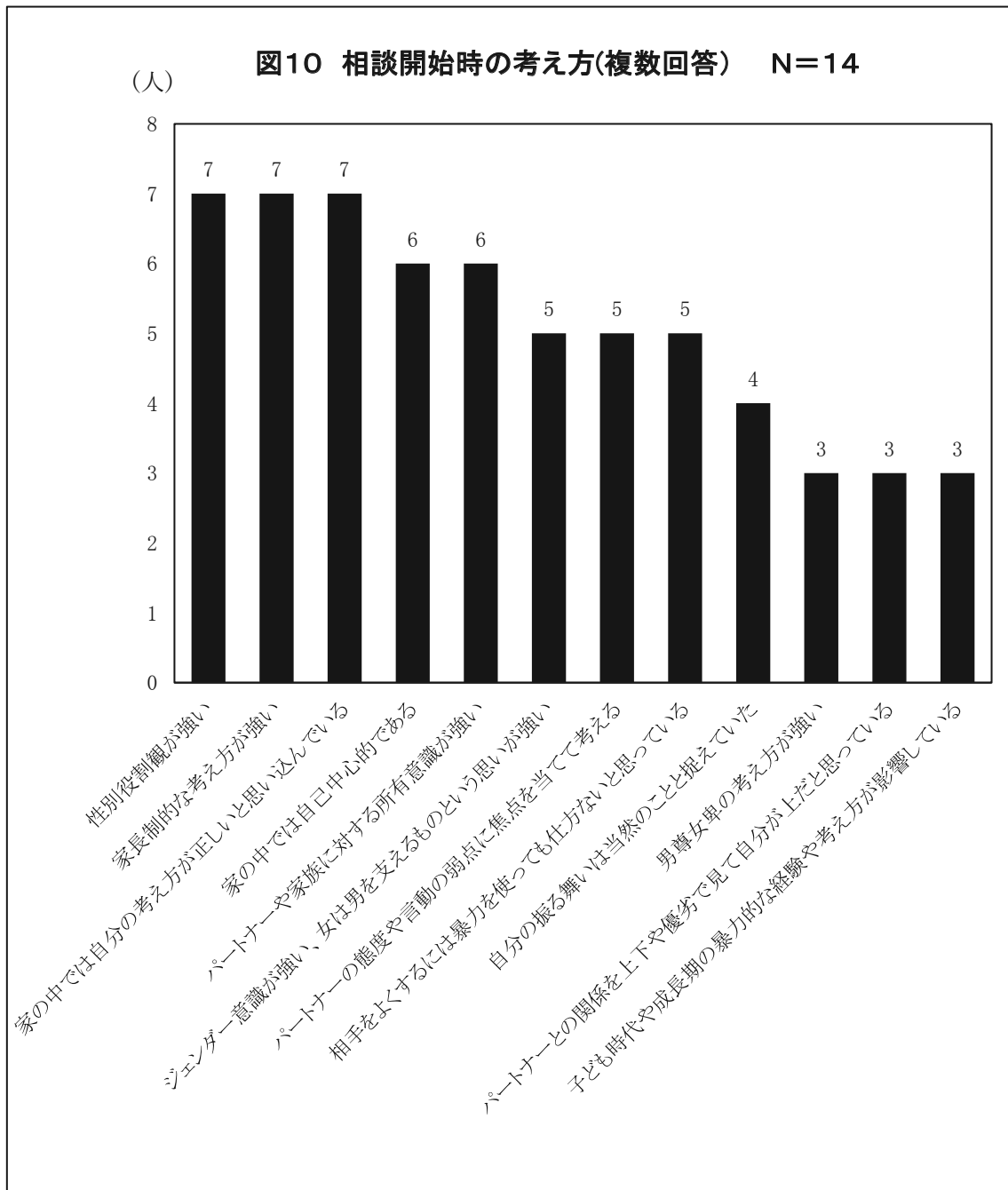


9) 図9 子ども時代に叩かれた経験があるか、誰から叩かれたか
叩かれたことがある人が10名で、その内訳は父から叩かれた人が一番多く6名で母からが2名、両親から叩かれた人が2名いた。しつけなどで叩かれた経験はなかった人は4名いた。



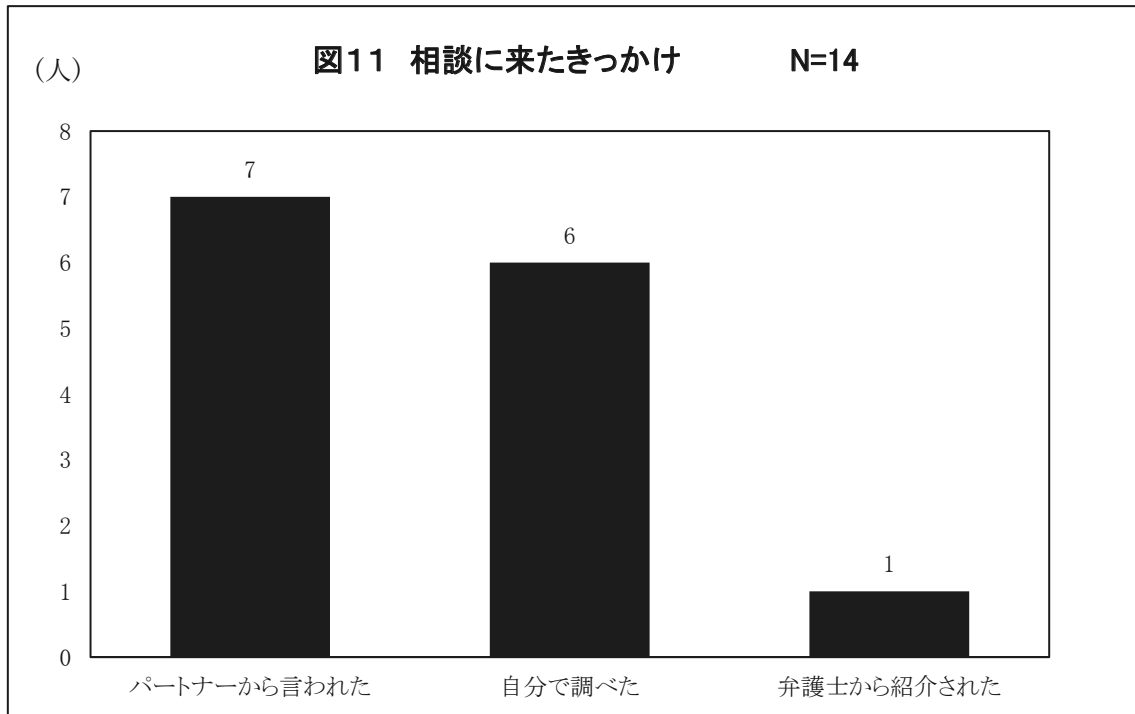
10) 図10 相談開始時の回答者自身の考え方について(複数回答)

「性別役割観が強い」「家長制的な考え方が強い」それに「家の中では自分の考え方が正しいと思い込んでいる」がそれぞれ7名と最も多い。「家の中では自己中心的である」「パートナーや家族に対する所有意識が強い」がそれぞれ6名いた。「ジェンダー意識が強い、女は男を支えるものという思いが強い」や「パートナーの態度や言動の弱点に焦点を当てて考える」、「相手をよくするためには暴力を使っても仕方がないと思っている」がそれぞれ5名いた。「自分の振る舞いは当然のことと捉えていた」が4名、「男尊女卑の考えが強い」、「パートナーとの関係を上下や優劣で見て自分が上だと思っている」、「子ども時代や成長期の暴力的な経験や考え方が影響している」がそれぞれ3名いた。



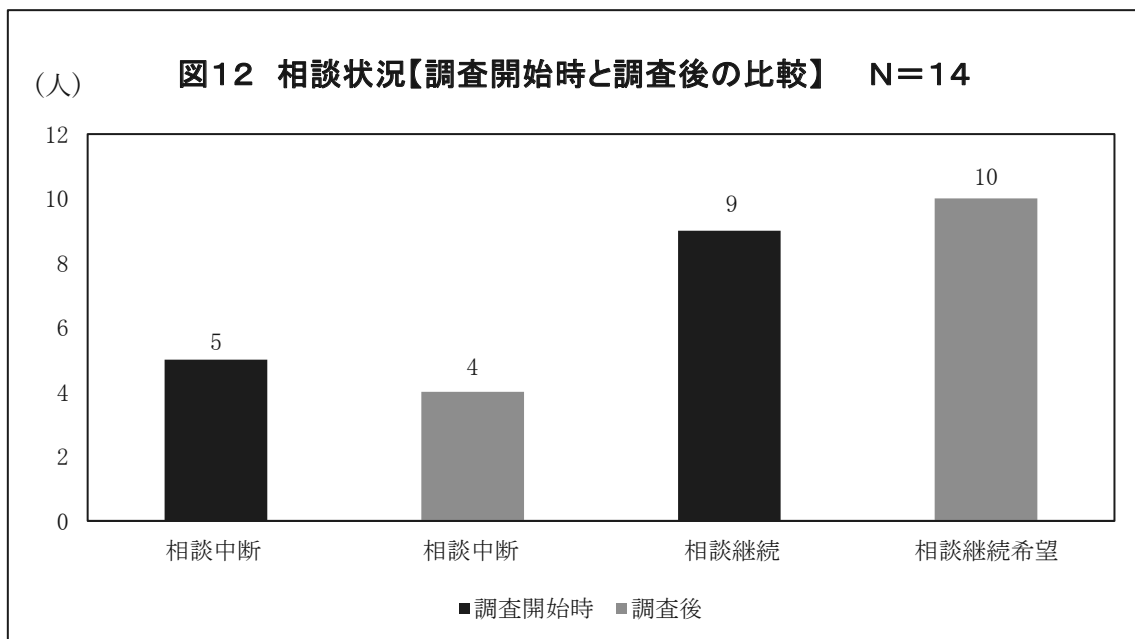
11) 図11 相談に来たきっかけについて

こころの健康センターに相談に来たきっかけは、パートナーから相談に行くように言われた人が7名と最も多く、自分で調べた人が6名、弁護士から紹介された人が1名いた。



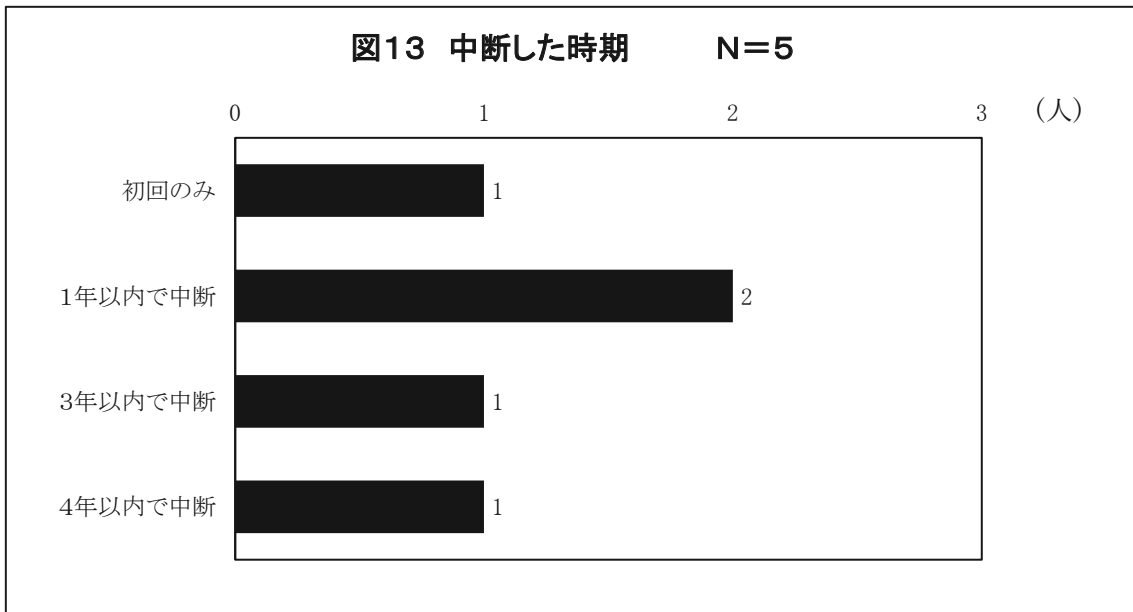
12) 図12 相談状況について【調査開始時と調査後の比較】

調査開始時、14名の内5名が相談を中断した人であったが、調査後に相談の再開を希望した人が1人増えて、相談希望者が10名になった。



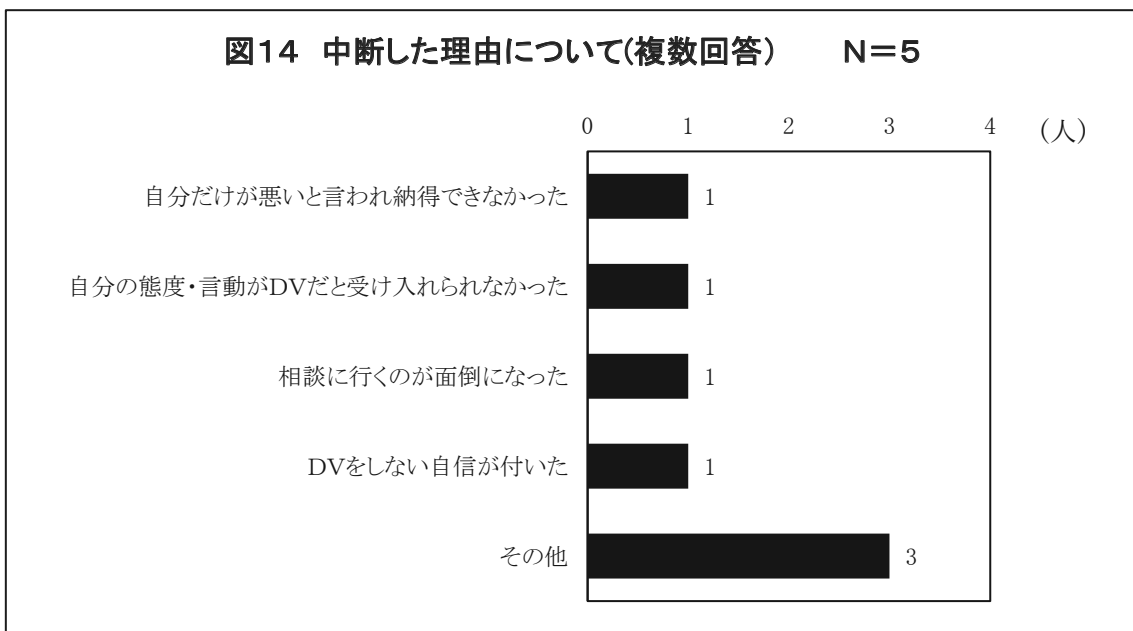
13) 図13 中断した時期について

相談を中断した5名の時期は初回のみが1名、1年以内が2名、3年以内が1名、4年以内が1名であった。



14) 図14 相談を中断した理由について

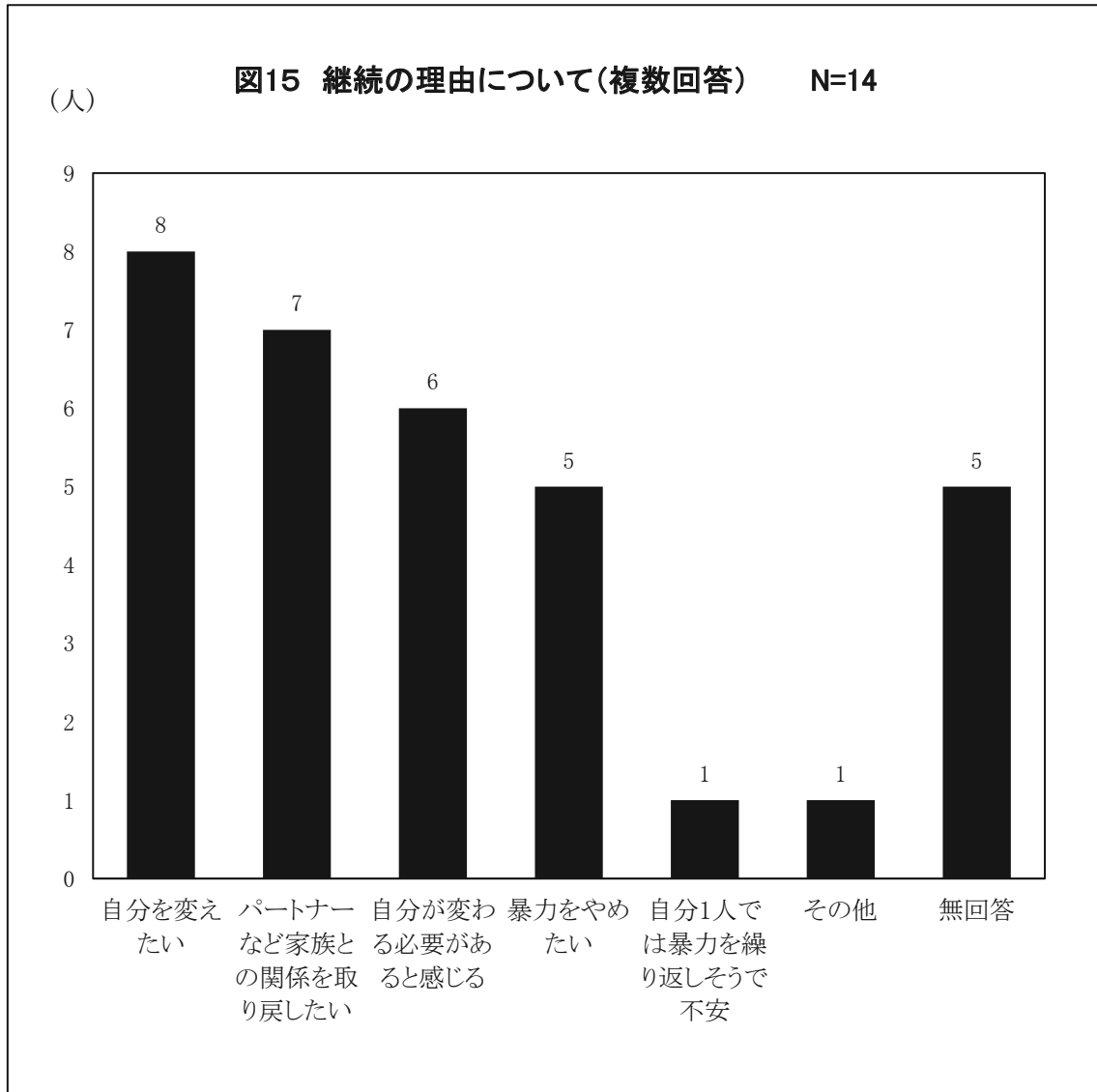
相談を中断した理由は、「自分だけ悪いと言われ納得が出来なかった」、「自分の態度や言動がDVだと受け入れられなかった」、「相談に行くのが面倒になった」、「DVをしない自信が付いた」から各々1名だった。
 その他は、「担当者がコロナになり、その後連絡がない」、「心療内科に通院した」、「自分が病気になって長期入院をした」という理由だった。



15) 図15 継続の理由について(複数回答)

「自分を変えたい」からが8名、次に「パートナーを含めた家族との関係を取り戻したい」からが7名、「自分が変わる必要があると感じるようになった」からが6名、「暴力をやめたい」からが5名いた。「自分一人では暴力を繰り返そうで不安」が1名いた。

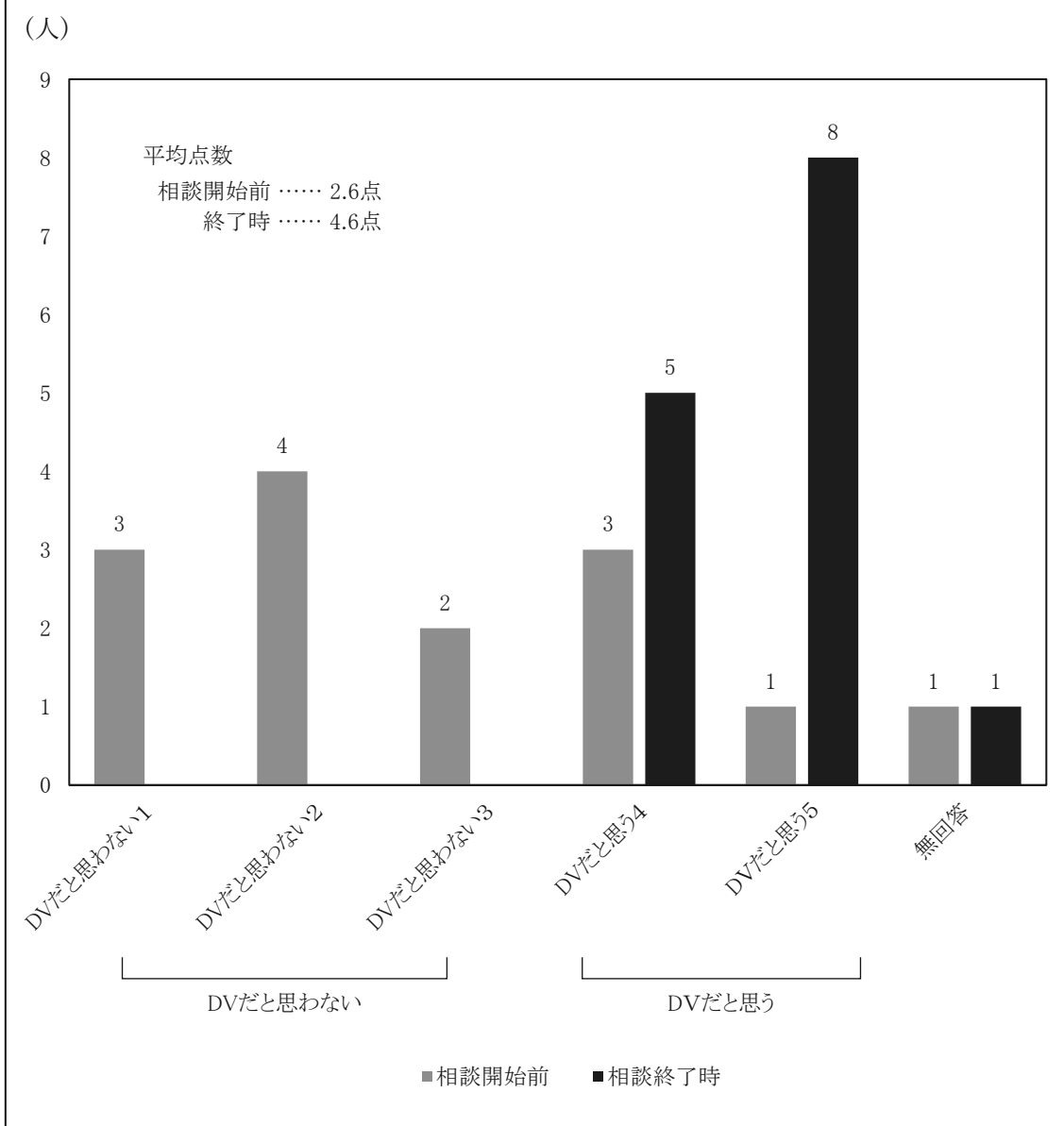
その他の理由がある人は、「暴力に頼る考え方はすでに無いが、人生や方向性の相談。被害者の行動、思いを知る事を目的に通っている」、「子どもがいるが、一番の被害者は子どもであり、そのより良い解決を模索している」であった。



16) 図16 暴力行動の意識の変化【相談の前後で比較】(複数回答)

自分の行動をDVだとは思うかを「0」から「5」の5段階評価で記入して貰った。5段階のうち「1～3」をDVだとは思わない。「4、5」をDVだと思いと区分した。面接開始時には暴力行動の意識としては自分の行動が暴力だと思っている人が4名、暴力だとは思っていない人が7名であった。しかし、相談終了時ではDVだと思う人は13名で、その段階は「4」が5名、「5」が8名であった。

図16 暴力行動の意識の変化【相談の前後で比較】(複数回答) N=14



17) 表 17 当センターで相談をすることでDVに対する意識の変化について

こころの健康センターで相談をするようになって「自分の考えを押しつけていたのかもしれないと思うようになった」、「自分の態度や言動がDVだと受け容れられるようになった」がそれぞれ10名、「家族との関係修復のために自分が変わらなければいけないと思うようになった。」、「自分の態度や言動に疑問を持つようになった」、「パートナーとの関係との関係の亀裂の原因がDVだと意識するようになった」がそれぞれ9名、「DVの責任は自分にあるのだと思えるようになった」が6名と、こころの健康センターで相談をすることで意識の変化があった。

その他の自由記載では、「暴力の選択は自分であり、過去と他人は変えられない、未来と自分を変えるために出来る事をする」、「他の方にも自分の経験を伝えたいとも思えるようになった」、「子どもに対して今まで取っていた態度はDVだったのではないかと思ひ接し方を変えるようになった」、「妻に対する態度も少しおおらかになることが出来るようになった」と変化の内容が記載されていた。しかし「自分はそんなにひどいことはしていない、自分は悪くないと思う」など「暴力を繰り返した」人も2名いた。

表17 DVに対するの意識の変化について(複数回答) N=14

人	10	10	9	9	9	6	5	3	2	2	2	2	2	3	1
意識の変化	自分の考えを押しつけていたのかも知れないと思うようになった。	自分の態度や言動がDVだと受け容れられるようになった。	家族との関係修復のために自分が変わらなければいけないと思うようになった。	自分の態度や言動に疑問を持つようになった。	パートナーとの関係の亀裂の原因がDVだと意識するようになった。	DVの責任は自分にあるのだと思えるようになった。	自分だけ変わってもパートナーも変わらないとダメだ。	自分だけが悪いのではない、怒らせるパートナーも悪い。	DV抑止加害者相談に参加するようになった。	自分の態度や言動が「DVかもしれない」と言う思いと「DVではない」と言う相反する思いによって葛藤が起きた。	自分はそんなにひどいことはしていない、自分は悪くないと思う。	自分の態度や言動がDVだとは受け入れられず、暴力を繰り返した。	パートナーとのやり直しは無理だと思うようになった。	その他の意見の変化がある人は自由に書いてください。	無回答

7. 調査研究結果

1. 回答率は46名中14名の30.4%であった。住所不明と郵便返送者が7名の15.2%いた。
2. 回答者は14名中相談開始時30代が5名で35.7%であった。
3. 相談開始時に別居中であった9名が相談後は4名になった。また、相談開始時一緒に生活をしていたが4名であったが相談後8名と増えた。
4. 相談開始前の暴力の種類は精神的暴力が13名で92.8%、次が身体的暴力が10名で71.4%、社会的暴力が2名で14.2%、性的な暴力、経済的暴力がそれぞれ1名で7.1%であった。
5. 暴力の期間や頻度については月1回から2回暴力を振るっていた人が最も多く4名、3ヶ月に1回と年に2回程度がそれぞれ3名、2年から3年に1回程度が2名、毎日暴力を振るっている人が2名いた。
6. 暴力行動をした時の対応では、「警察を呼ばれたことのある」人と「家庭裁判所で調停をした」人がそれぞれ3名と最も多かった。「被害届や起訴されたことがある」、「保護命令処分を受けた」人がそれぞれ1名いた。警察を呼ばれた人が3名いたが逮捕に繋がっていないことも分かった。
7. パートナー以外の暴力行動については子どもに対して暴力を振るった人が6名いた。
8. 子ども時代に家庭内で暴力が行われているのを見たことがあった人が5名で42.8%であった。
9. 子ども時代に叩かれた経験がある人が10名で71.4%で、その内訳は父親から叩かれた人が6名で42.8%、母親から叩かれた人が2名で14.2%、両親から叩かれていた人は2名で14.2%いた。
10. 相談開始時の回答者自身の考え方は「性別役割観が強い」「家長制的な考え方が強い」「家の中では自分の考え方が正しいと思い込んでいる」人がそれぞれ7名と多かった。
11. こころの健康センターに相談に来たきっかけは「パートナーから言われた」人が7名で50%、「自分で調べた」人が6名で42.8%、「弁護士から紹介された」人が1名いた。
12. 相談状況の変化について調査開始時と調査終了時期の比較で中断していた人が相談の再希望された人が1名いた。
13. 相談を中断した人が5名いたが、その中断の時期は、1年以内の人が3名、3年以内と4年以内の人がそれぞれ1名いた。
14. 相談を中断した理由については「自分だけが悪い、納得できなかった」「自分の態度・言動がDVと受け入れられなかった」「相談に行くのが面倒になった」「DVをしない自信がついた」、また、その他の理由ではコロナ感染の影響、心療内科に通院した、自分自身が長期入院した等があった。
15. 相談継続の理由については「自分を変えたい」人が8名の57.1%、「パートナーなど家族との関係を取り戻したい」人が7名の50%、「自分が変わる必要があると感じる」人が6名の42.8%、「暴力をやめたい」人が5名の35.7%であった。
16. 暴力行動の意識の変化については、相談開始時は、自分の行動が暴力だとは思っていない人が9名(64.2%)と多く、暴力だと思っている人が4名(28.5%)と少なかった。相談終了時の意識の変化としては、自分の行動が

暴力だと思わない人が0人になり、暴力だと思ようになった人が13人(92.8%)となった。相談を受けることで自分の行動に対する意識の変化が見られた。

17. こころの健康センターで相談することによるDVに対する意識の変化としては「自分の考えを押しつけていたのかもしれないと思うようになった」人が10名、「自分の態度や言動がDVだと受け容れられるようになった」人が10名、「家族との関係修復のために自分が変わらなければいけないと思うようになった」人が9名、「自分の態度や言動に疑問を持つようになった」人が9名、「パートナーとの関係の亀裂の原因がDVだと意識するようになった」人が9名と、相談することで意識が高くなったことがわかる。

8. 調査研究結果の考察

この調査研究の目的はDV男性加害者がDV脱却に向かう過程で、どのようにDVの問題を意識し、向き合い、受け容れていくかを明らかにすることである。本気で暴力を何とかしようと思うのにはとても勇気がいるため、その過程を明らかにすることが大切と考えた。

この調査の対象者数は46名で回答協力者は14名であった。中でも5名が相談中断者であった。対象者のうち7名が住所不明で調査書が戻ってきた。相談中断者の意識を理解するためにもこの5名には心より感謝をしたい。又現在9名の相談継続者に協力を得られたことで、DV加害者支援を受けたことによる意識の変化やDVの問題に向き合う過程を明らかにすることが出来たと思われる。

DV加害者の個別相談では、通常精神保健福祉相談のような気持ちへの寄り添いだけでなく、どんなことが暴力であるのか、暴力の定義を考える作業を対象者と一緒に行っている。

DV加害者が暴力に至った経緯を自ら話すことで認識を見直し、暴力とは何かを一緒に考え、被害者のせいで暴力に至ったのではなく、加害者自身が暴力を選択しているのだという気付きを促している。本質的な意識変化に至っているかの評価は難しいが、知識としては変化があったと考えられる。

図16の暴力行動の意識の変化としては、無回答以外の13名の5段階評価の平均得点が、相談開始前2.6点から相談終了時4.6点に変化している。このことから本人の意識が高まったことが分かった。自身が行っていた行為が暴力であったことを認めるには非常に勇気がいるが、相談を継続することで認識が変化したと考えられる。

図3の相談開始時の状況としては、パートナーと別居中だった人が9名、一緒に生活していた人が5名であったが、現在は別居中が4名、一緒に生活しているが8名と変化している。DV加害者が暴力抑止のための相談をすることで、パートナーとの関係の再構築に影響していることが推察される。

図10の相談開始時の考え方としては、研究責任者がDV加害者の話を聞く中で多く語られた、男尊女卑、性別役割意識、家長性的な考え方などのDV男性加害者に共通していると思われる考え方を選択肢として12項目設定した。

12項目中、相談を中断した人は平均3.8個の選択肢を選んでおり(うち1名が12項目を選択しており全体平均の影響が大きい)、その1名を除くと選択数の平均は1.75個)、継続している人は平均4.6個を選んでいた。単純に比較することはできないが、相談を継続することで、相談開始時の自身の考え方を振り返り、明確化することができるようになるかと推察される。

相談開始時には自分の行動をDVだと思っていない人が相談を継続することで全ての人で自分の行動をDVだと認識するようになったことは大きな変化であり、暴力抑止のDV男性加害者支援の効果であると言える。相談開始時の考え方を見ると、性別役割観が強く、家長制的な考え方も強い。家の中では自分の考え方が正しいと思い込んでいる人が多いことも分かった。そのため家の中では自己中心的であり、パートナーや家族に対して所有意識が強いことも分かった。また、相談継続者は、「自分が変わりたいから」「パートナーを含めた家族との関係を取り戻したいから」「自分が変わる必要があると感じるようになったから」と回答しており、そのためには当センターの相談を継続する必要性があると考えられる。

表17からは、相談を継続していく上でDVに対する意識の変化が見られる。自分の考えを押しつけていたのかも知れないと思うようになり、自分の態度や言動がDVだと受け容れられるようになった。また、自分の態度や言動に疑問を持つようになった。パートナーとの関係の亀裂の原因がDVだと意識するようになったことは、大きな変化であり、DVをやめようとする原動力になると思われる。

自分だけが悪くないという考え方から、家族との関係修復のためには自分が変わらなければいけないとの意識の変化があった。こころの健康センターでは、まだグループ活動による支援は出来ていないが、個別面接であっても、暴力抑止のDV男性加害者支援をすることは、大いに加害者の意識変革に有益であると思われる。

現在、当センターで相談を継続している方は全て、研究責任者が集めた参考文献を参考にして開発したDV加害者支援プログラム「ELIGO」を利用している。「ELIGO」とは、ラテン語で「私は選択する」という意味であり、プログラムを通して「自分の行動は自分の選択である。暴力を選択しているのは加害者自身」というメッセージを伝えている。

相談開始時の面接では、加害者は「あいつが言うことを聞かないからだ」「わざと怒らせるような言い方をすると、暴力の責任を被害者に転嫁する人がほとんどである。しかし、実際は相手をコントロールするために非常に有効で手っ取り早い方法として、時と場所・相手に応じて暴力を選んで使っている。まさに、自分で暴力を選択しているのである。

本調査では、個人が特定されない調査手法であるため、「ELIGO」への参加の有無による比較はできないため、今後さらなる評価が必要である。

◆参考文献

1. 『ドメスティック・バイオレンス 男性加害者の暴力の試み』
草柳和之(岩波ブックレット)
2. 「加害者のDV克服支援からの新たな視点 ― フェミニズムと“加害者臨床”の
統合モデルに向けての試論」草柳和之(国立婦人教育会館研究紀要第4号)
3. 「ドメスティック・バイオレンス加害者男性の自助グループ活動 ― DV暴力克服
プログラムの一部門としての考察」草柳和之(安田生命社会事業団・研究助成
論文集 No35)
4. 『ドメスティック・バイオレンスへの挑戦 ― 加害問題を乗り越えるために(仮題)』
草柳和之(ビイング・ネット・プレス、近刊)
5. 『デートDV防止プログラム時死者向けワークブック』山口のり子(梨の木舎)
6. 『DVあなた自身を抱きしめて? アメリカの被害者・加害者プログラム』
山口のり子(梨の木舎)
7. 『脱暴力のためのファシリテート』味沢道明(レターカウンセリングあのね)
8. 『メンズカウンセリング実践』味沢道明(レターカウンセリングあのね)
9. 『殴るな!』味沢道明(日本家族再生センター)
10. 『なぜ男は暴力を選ぶのか』沼崎一郎(かもがわ出版)
11. 『加害者は変わるか?』信田さよ子(筑摩書房)
12. 『感情はコントロールできる』D・ディンクメイヤー/G・D・マッケイ
柳平 彬(創元社)
13. 『どうしても許せない人がいるときに読む本』苳屋仁之助(中経出版)
14. 『自分の気持ちをきちんと伝える技術』『自分の感情を上手に表現する』
平木典子(PHP 出版)
15. 『イライラしない心のコントロール術』安藤俊介 (宝島社)
16. 『グラッサー博士の選択理論』『幸せな人間関係を築くために』
ウイリアム・グラッサー(著者)柿谷正明(訳者)(アチーブメント出版)
17. RRP研究会『被害者支援の一環としてのDV加害者更生プログラム』
18. 内閣府『平成15年度 配偶者からの暴力の加害者更生に関する調査研究』
19. 『医療観察制度 通院・地域処遇[研修/実践]ハンドブック』2018年3月
(厚生労働科学研究 障害対策総合研究事業)

資料編

DV男性加害者の意識に関する調査実施要領

1. 目的 DV男性加害者がDV脱却に向かう過程の中で、どのようにDVの問題を意識し、向かい合い、受け入れていくかについて明らかにすることを目的とする。
2. 実施主体 石川県こころの健康センター
3. 対象 平成25年度以降に個別面接をしたDV男性加害者46名
(別紙名簿)
4. 実施期間 令和4年4月～令和4年9月末日
5. 調査方法 アンケート調査用紙を調査対象者に郵送し、回答を返信用封筒にて返信してもらう。

DV男性加害者の意識に関するアンケート調査にかかる協力依頼について

石川県こころの健康センター

所 長 角 田 雅 彦

福祉専門員 深 谷 敏 (研究責任者)

仲春の候、いかがお過ごしでしょうか。

この度、DV加害者がDV脱却に向かう過程でどのようにDVを意識し、向かい合い、受け入れて行くかを明らかにすることで、DV加害者への支援の充実を図る事を目的に、下記によりアンケート調査を実施することにしました。

つきましては、ご多忙中とは存じますが、是非ご協力を賜りたく、よろしく願いいたします。

なお、調査結果につきましては、報告書の形でお返りする予定です。

末筆ながら、調査対象者の皆様が安心安全な日々をお送りになられることを祈願しております。

記

1. 調査内容

別添アンケート調査票(両面刷り)のとおり

2. 調査協力による利益と不利益

本調査に協力することでの直接の利益はありません。

調査は自由意志による参加であり、断っても不利益が生じることはありません。

本調査の同意についてはアンケート調査票の提出をもって同意とみなします。

3. 個人情報の保護、プライバシーの保護について

本調査は報告書としてまとめますが、その際、個人情報の取り扱いには十分配慮し、紛失や漏洩が発生しないように努めますとともに、この調査報告のみに使用し、第三者に提供することはありません。

本調査は石川県保健環境センター倫理審査委員会の承認を得て実施します。

4. 調査期限

令和4年4月1日(金)から令和4年5月15日(日)までとし、令和4年 5 月22日(日)までに返信用封筒に入れて、ご郵送ください。

なお、アンケート調査票を提出する時に、返信封筒には住所、氏名は記載不要です。

【問合せ先】

〒920-8201 石川県金沢市鞍月東2丁目6番地

石川県こころの健康センター

担当 深谷 敏

TEL 076-238-5750

FAX 076-238-5762

調査票

問1 相談開始時の年齢について該当するものに○をつけてください（ひとつだけ）

1. 20代前半
2. 20代後半
3. 30代前半
4. 30代後半
5. 40代前半
6. 40代後半
7. 50代前半
8. 50代後半
9. 60代前半
10. 60代後半
11. 70代前半
12. 70代後半
13. 80代前半

問2 相談開始時のパートナーとの状況について該当するものに○をつけてください（ひとつだけ）

1. 一緒に生活をしていた。
2. 別居中であった。
3. 離婚していた。

問3 現在の状況について該当するものに○をつけてください（ひとつだけ）

1. 離婚をした。
2. 別居中である。
3. 一緒に生活をしている。
4. 新しいパートナーと生活している。

問4 相談開始前にあなたが行った暴力行動について該当するものをすべて選び○をつけてください（複数回答可）

1. 身体的暴力:殴る、蹴る、髪の毛を引っ張るなど。
2. 精神的暴力:馬鹿にする言葉を言う、汚い言葉を浴びせる、ものを投げつける、ものを壊す、ドアをバタンと強く締める、にらみつけるなど。
3. 性的な暴力:無理やりセックスを強要する、避妊をしないなど。
4. 経済的締め付け・封鎖:自由なお金を持たせない、お金の支出をすべてチェックするなど。
5. 社会的な暴力:行動を管理するなど。

問5 相談開始前の暴力行動の期間や頻度について該当するものに○をつけてください（ひとつだけ）

1. 毎日行っていた。
2. 月に1～2回行っていた。
3. 3ヶ月に1回程度行っていた。
4. 年に2回程度行っていた。
5. 2～3年に1回程度行っていた。

問6 相談開始前、暴力行動をした時どのような対応をされたか、該当するものをすべて選び○をつけてください（複数回答可）

1. 家庭裁判所で調停をした。
2. 保護命令処分を受けた。
3. 警察を呼ばれたことがある。
4. 逮捕されたことがある。
5. 被害届や起訴されたことがある。

問7 相談開始前にパートナー以外にも暴力行動をしましたか。該当するものすべてを選び○をつけてください(複数回答可)

1. 子どもに対して暴力をふるったことがある。
2. 職場で暴力をふるったことがある。
3. 友だちに対して暴力をふるったことがある。
4. 近所の人に対して暴力をふるったことがある。
5. 親に対して暴力をふるったことがある。

問8 子ども時代について伺います、該当するものをすべて選び○をつけてください(複数回答可)

1. 子ども時代にしつけなどで叩かれた経験がある。
2. 誰から叩かれましたか。()
3. しつけなどで叩かれたことはなかった。
4. 子ども時代に家庭の中で暴力が行われているのを見たことがあった。
5. 誰が暴力をしていましたか。()
6. 家庭の中で暴力はなかった。

問9 相談開始時のご自身の考え方に該当するものをすべて選び○をつけてください(複数回答可)

1. 男尊女卑の考え方が強い。(女性を見下す意識)
2. 性別役割観が強い。
3. ジェンダー意識が強い、男らしさ、女らしさ、女は男を支えるものと言う思いが強い。
4. 家長制的な考え方が強い、父親だから家族を引っ張っていくのが当然だと思い込んでいた。
5. 自分の振る舞いは当然のことと捉えていた。
6. 家の中では自分の考え方が正しいと思い込んでいる。
7. 家の中では自己中心的である。
8. パートナーや家族に対する所有意識が強い。
9. パートナーの態度や言動の弱点に焦点を当てて考える。
10. 相手をよくするには暴力を使っても仕方がないと思っていた。
11. パートナーとの関係を上下や優劣で見て自分が上だと思っている。
12. 子ども時代や成長期の暴力的な経験や考え方が影響している。

問10 こころの健康センターに来たきっかけについて該当するものをすべて選び○をつけてください(複数回答可)

1. パートナーから相談に行くように言われた。
2. パートナー以外の家族から行くように言われた。
3. 市町の相談機関から紹介された。
4. 家庭裁判所の調停委員から紹介された。
5. 警察から紹介された。
6. 弁護士から紹介された。
7. 自分で調べた。
8. その他()

問11 こころの健康センターでの相談について該当するものに○をつけてください（ひとつだけ）

1. 相談を中断した。 →問12、問13、問14、問16、問17にお進みください
2. 終了した。 →問16、問17にお進みください
3. 相談を継続している。 →問15、問16、問17にお進みください

問12 問11で1を選んだ人は下記の該当するものに○をつけてください（ひとつだけ）

1. 初回のみでの相談で中断した。
2. 1～3回で中断した。
3. 1年以内で中断した。
4. 3年以内で中断した。
5. 4年以内で中断した。

問13 中断した理由について、該当するものをすべて選び○をつけてください（複数回答可）

1. 自分だけが悪いと言われ、納得できなかったから。
2. 自分の態度や言動がDVだと受け容れられなかったから。
3. 暴力をやめようと努力したが離婚になったから。
4. 相談に行くのが面倒になったから。
5. DVがいけないと受け容れることができるようになったから。
6. DVをしないという自信がついたから。
7. 年度が変わり担当者が変わったから。
8. コロナウイルス感染拡大がきっかけで行かなくなったから。
9. 仕事の関係で行けなくなったから。
10. その他の理由がある人は自由に書いてください。

[]

問14 相談を中断している方にお聞きます、相談の再開を希望されますか○をつけてください（ひとつだけ） 問16・17にお進みください

1. 相談を希望する
2. 相談を希望しない

※相談希望の方は別紙に氏名、住所、電話番号を書き同封の小封筒にて返送ください。

問15 問11で3を選んだ人は相談を継続している理由について、該当するものをすべて選び○をつけてください（複数回答可） 問16・17にお進みください

1. 暴力やめたいから。
2. パートナーを含めた家族との関係を取り戻したいから。
3. 自分を変えたいから。
4. 自分が変わる必要があると感じるようになったから。
5. 自分一人ではまた暴力を繰り返しそうで不安だから。
6. その他の理由がある人は自由に書いてください。

[]

問16 暴力行動についての意識の変化について該当する数字に○を付けてください

	1	2	3	4	5
相談開始時	-----				
	DVだと思わない			DVだと思う	
相談終了時	1	2	3	4	5
(相談中断時)	-----				
	DVだと思わない			DVだと思う	

問17 センターで相談することでDVに対する意識の変化があったかどうかについて該当するものをすべて選び○をつけてください（複数回答可）

1. 自分の態度や言動がDVだとは受け容れられず、暴力を繰り返した
2. 自分はそんなにひどいことはしていない、自分は悪くないと思う。
3. 自分だけが悪いのではない、怒らせるパートナーも悪い。
4. 自分だけ変わってもパートナーも変わらないとダメだ。
5. 自分の考えを押し付けていたのかもしれないと思うようになった。
6. 自分の態度や言動に疑問を持つようになった。
7. パートナーとの関係の亀裂の原因がDVだと意識するようになった。
8. DV抑止加害者相談に参加するようになった。
9. 自分の態度や言動がDVだと受け容れられるようになった。
10. 自分の態度や言動が「DVかもしれない」という思いと「DVではない」と言う相反する思いによって葛藤が起きた。
11. DVの責任は自分にあるのだと思えるようになった。
12. 家族との関係修復のために自分が変わらなければいけないと思うようになった。
13. パートナーとのやり直しは無理だと思うようになった。
14. その他の意識の変化がある人は自由に書いてください。

()

※ アンケート調査にご協力いただきありがとうございました。

調査票を令和4年5月22日(日)までに返信用封筒にてお送りください。

別紙

DV相談の再開を希望します。

令和 年 月 日

氏名 _____

住所 _____

電話番号 _____

石川県こころの健康センター調査研究

調査研究テーマ

「DV男性加害者の意識に関する調査」

令和4年10月

発行：石川県こころの健康センター

〒920-8201 金沢市鞍月東2丁目6番地

電話 076(238)5750 (相談課直通)

FAX 076(238)5762

ホームページアドレス

<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/fukusi/kokoro-home/kokoro/top.html>